

太宰治

DAZAI OSAMU

「太宰の文章は、読者への手紙である」と語ったのは、太宰研究家として有名な奥野健男である。生きることの歓びと哀しみ、善と悪、高貴と卑しさ。太宰は、人間の奥深くにひそむ根元的な業を天賦の才能であぶり出し、私信のように読み手に送り続けた。

六月十九日

「私の生れた日は明治四十二年の六月十九日である。」

「私は子供の頃、妙にひがんで、自分を父母のほんどうの子ではないと思いついていたことがあった。」

「夕暮でした。あの、小間で生れたのでした。蚊帳の中で生れました。ひどく安産でした。すぐに生れました。鼻の大きいお子でした。色々の事をはつきり教えてくれるので、私も私の疑念を放棄せざるを得なかった。なんだか、がっかりした。自分の平凡な身の上が不満であった。」（六月十九日「昭和15年執筆」）

太宰治（本名 津島修治）は、明治42年、父・源右衛門と母タ子（タネ）の6男として、青森県北津軽郡金木村（現・五所川原市）に生まれました（11姉弟の内第10子）。生家は大地主で、後に貴族院議員を務める父・源右衛門は、地元で津軽の殿様と呼ばれていました。地主貴族の子。これは、鋭敏な感性の持ち主である太宰の生涯に影のようにつきまとったコンプレックスでもあったのです。幼少の頃、誰よりも道化を演じてみせたのは、怖れる人間に対する煙幕と、自己顕彰によるものだったろう。病弱な母に代わって、太宰は同居していた叔母・きさや、子守りの越野タケに育てられました。添い寝しながら毎晩聞いた「昔ッコ」の独特のリズムと旋律は、後の太宰が「語り口調の天才」と呼ばれる原体験になったのかもしれない。



昭和21年、東京銀座のパー・ルパンにて。（撮影：林忠彦/所蔵：周南市美術博物館）

今なお魅了してやまない太宰文学。生地探訪。



太宰治肖像（青森県近代文学館提供）

「斜陽」そして「人間失格」

県立青森中学、官立弘前高等学校、東京帝国大学。大正デモクラシー、マルキシズムの洗礼を受けて、太宰の苦悩は深まっています。自殺未遂、心中未遂、薬物中毒。そんななか、昭和14年に、恩師・井伏鱒二の紹介で石原美知子と結婚。東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）を出て教師をしていた美知子は、後に著書『回想の太宰治』で語っています。「著書を読んだだけで会わぬさきからただ彼の天分に眩惑されていた」と。

創作意欲を取り戻した太宰は、『富嶽百景』、『走れメロス』、『津軽』、『お伽草紙』、『斜陽』など後世に残る名作を執筆し、時代の寵児として名をあげていきます。しかし、自伝的ともいえる『人間失格』を書いてまもない昭和23年、愛人・山崎富栄と共に玉川上水に入水し、この世を去ります。

「撰ばれてあること」の恍惚と不安と「二つわれにあり」

これは太宰が生前、もつとも好んで口にしたといわれる「ヴェルレーヌ（フランスの詩人）」の一節。芦野公園にある「太宰治文学碑」に刻まれており、中央の鉄格子は、「人間の道には狭いかわしい一つ一つの門がある」ということを意味しています。

文学碑と銅像は、太宰がよく遊んだ芦野公園の登仙岬に建立されています。毎年6月19日には、ここで太宰治生誕に関するイベントが行われています。



太宰治文学碑



太宰治銅像

太宰治記念館「斜陽館」

明治40年に建て

られた太宰の生家。国の重要文化財に指定され、蔵を利用した展示室には、太宰治が生

前着用していた二重回しのマントや執筆用具、初版本、翻訳本、書簡などの他、津島家で使用していた調度品なども展示しています。



斜陽館



斜陽館内

斜陽館の離れ「新座敷」

終戦直前の昭和20年7月末から、東京や甲府の戦禍から逃れた太宰は、妻子と共にここに身を寄せていました。翌年11月まで滞在し、「パンドラの匣」、「冬の火花」など23もの作品を執筆しました。ギャラリースペースもあり、地元芸術家らの展示会なども開催しています。



新座敷



新座敷

小説『思ひ出』の背景

太宰は幼い頃、子守のタケに連れられてよくこの寺を訪れました。「思ひ出」に登場する『地獄極楽の御絵掛地』は、実際には極楽の絵は無く地獄の絵だけです。また、後生車は不慮の死をとげた子供達の供養のために建立されたもので、子供達に沢山回してもらったことにより魂が成仏できるとされていました。

昭和21年、金木町に文化会を作ろうという地域の有志が集い、「雲祥寺」本堂で発会式を開催。この席で太宰は講演を行いました。同年7月1日発行の『金木文化』創刊号の扉に、太宰は贈る言葉として、「汝を愛し、汝を憎む」という言葉をしたためています。



地獄極楽の御絵掛地



雲祥寺（地図/P18:F-3）

まちなか「思ひ出」パーク

大正5年1月18日、太宰治が幼少の頃、母と慕った叔母キエの一家が、太宰の生家である金木の津島家から分家した際に建てられ、太宰もたびたび訪れた蔵を、平成26年に再築したのが「太宰治「思ひ出」の蔵」です。他にも飲食店がある商業施設「トカトントン・スクエア」があります。



太宰治記念館「斜陽館」

- 開館/9:00~17:30(4月~9月)、9:00~17:00(10月~翌3月)
- 休館/12月29日 ●料金/一般600円、高大400円、小中250円
- 交通/津軽鉄道金木駅より徒歩約7分
- 問/☎0173-53-2020 ●地図/P18:F-3

旧津島家新座敷

- 開館/9:00~17:00
- 休館/第1・3・5水曜（その他臨時休館有り、要問合せ）
- 料金/一般500円、小中250円（希望者にはガイド有り）
- 交通/津軽鉄道金木駅より徒歩約4分、斜陽館より徒歩約4分
- 問/白川☎0173-52-3063 ●地図/P18:F-3

太宰治「思ひ出」の蔵

- 開館/10:00~17:00
- 休館/8月13・14日、12月31日~翌1月2日
- 料金/大人200円、中高100円、小学以下無料
- 問/まちなか五所川原☎0173-33-6338
- 地図/P17:C-2

太宰治ゆかりの地文学散歩

- 時間/10:00~（除外日：お盆期間、年末年始）※時期により受付できない場合もあります（要問合せ）
- 料金/2時間コース(2名以上) 1名2,800円(1名の場合3,800円) 3時間コース5,000円(4月~11月)
- 定員/2~9名(10名以上は要相談) ※2名以上、3日前まで要予約
- 場所/津軽鉄道金木駅集合
- 問/太宰治記念館「斜陽館」☎0173-53-2020
- 地図/P18:F-4(金木駅)

生家や戦時中に疎開していた家など太宰治ゆかりの地が数多く残る五所川原市金木地区を地元ガイドと歩いてみませんか。



南臺寺（地図/P18:F-3）